

地域連携・フロンティアセンター

平成 27 年度実績報告



目次

A. 目的と運営	1
1. 目的	
2. 組織運営	
B. 事業	3
1. 研修部門	
1) フロンティアセミナー部会	3
2) スキルアップセミナー部会	8
3) 実習指導者研修部会	10
2. 地域連携部門	19
1) ケアリング・フロンティア広尾	19
2) リサーチフェスタ	19
3. 災害看護部門	23
1) 武蔵野市地域防災活動部会	23
2) なみえプロジェクト	29
3) 災害看護・支援活動情報収集	38

A. 目的と運営

1. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的ノウハウをもとに、人々に求められる看護の可能性を追求し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターをその前身としている。新たな発想で創造的な活動を行う必要があるとの共通認識のもとにスタートして10年目を迎えた平成27年度、地域連携の推進をその活動の中心に据えることをその目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新しい出発となった。

本センター設置の目的は、本学の教育・研究に基づき、地域との連携・貢献、社会への発信・貢献である。そのために果たす機能は主に以下のとおりである。

- (1) 地域連携の推進に関する事業の企画実施に関する事項。
- (2) 生涯学習等に関する教育内容・方法の研究に関する事項。
- (3) 公開講座、セミナー等の企画運営に関する事項。
- (4) 看護実践・教育・研究に関する事項

2. 組織運営（図1）

フロンティアセンターの活動は、①研修部門として、フロンティアセミナー部会・スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、現任教員研修部会、②地域連携部門としてケアリング・フロンティア広尾、③災害看護部門として武蔵野市地域防災活動部会となみえプロジェクトに大別され、今年度新たに地域連携を推進するためのプロジェクトが発足したところである。

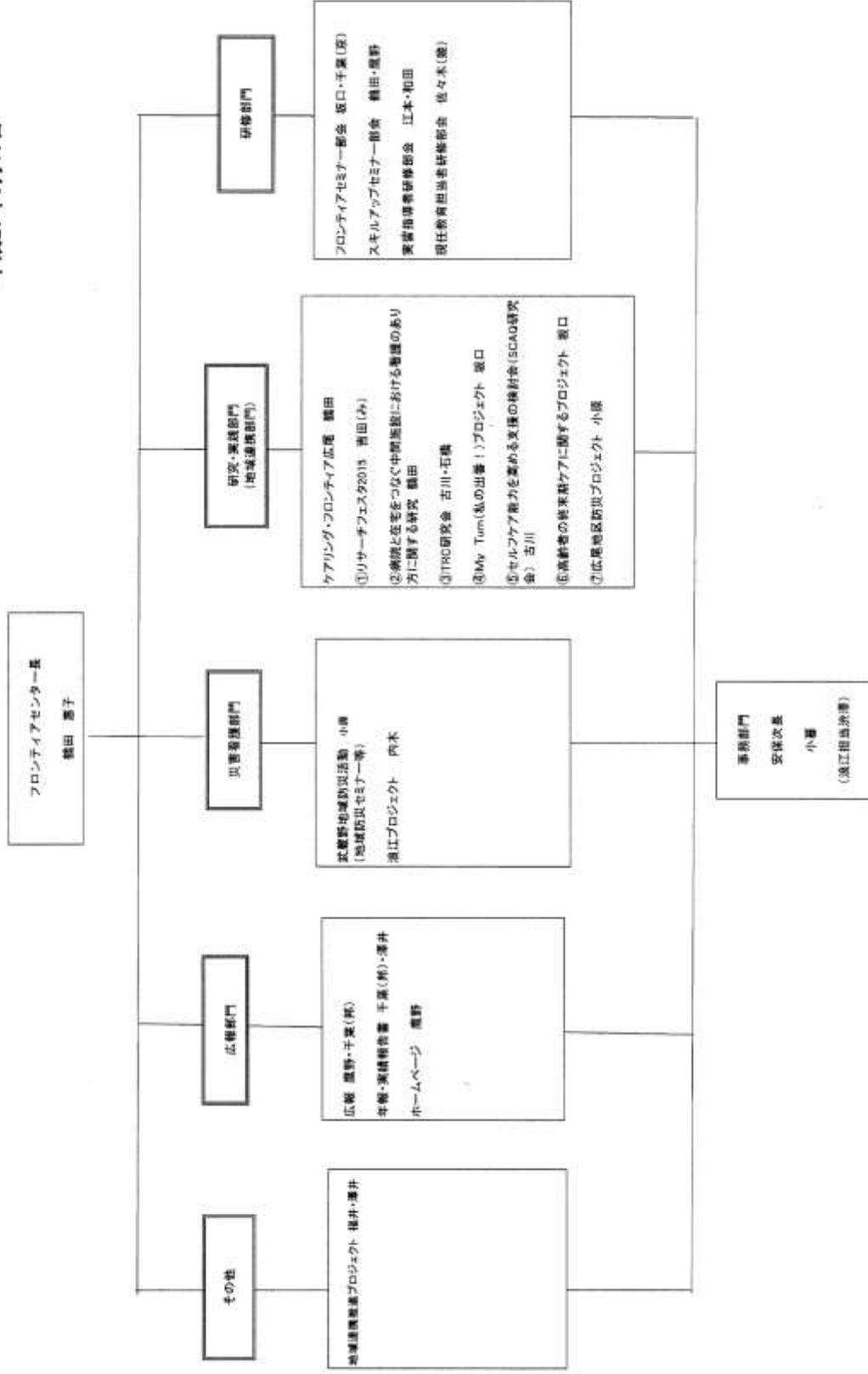
同センターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会において検討している。運営委員会は、平成27年度は年11回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。平成27年度の各事業実施にあたっては、学内の教職員のほか前年までの事業の参加者、修了者など幅広い力を得て運営した。

平成25年度より開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は3年目となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社付属乳児院と協働の独立した組織として各プロジェクトを定着させるとともに新たな可能性を探り始めた。災害看護支援活動のうち、武蔵野市地域防災活動は長年にわたる実績をもとに武蔵野市との協定を結ぶ運びとなった。浪江町健康支援は安定的な活動を展開している。認定看護師教育課程は平成26年度末をもって閉講したが、認定看護師へのスキルアップセミナーは大変ニーズが高く継続開催している。

今後は本センターが中核となり、大学と地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

平成27年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター運営組織図

平成27年9月17日



B. 事業

1. 研修部門

1) フロンティアセミナー部会

①セミナーの趣旨

平成 25 年度のフロンティアセミナーでは、すでに企業とのパートナーシップを組み積極的に人材育成を行っている他大学の試みをもとに、看護学生を育てる大学側の視点と新人看護師を教育する病院側の視点で意見交換を行いながら、新たな方向性を見出すことを期待して実施致しました。その結果、8 割近くの参加者が肯定的に捉え、多くの学びを得たとの回答があった一方で、直属の教育機関を持たない病院は大学とどのように連携をしなければよいのかとの質問、また新人看護師だけでなく中堅看護師への支援についての要望、さらに病院と大学との間での新人看護師を含めた現任教育に関する意見交換の場の必要性等の提案がありました。

それらの意見をもとに、平成 26 年度のフロンティアセミナーでは、「看護師に対して教育的かわりができる人材の育成・支援」をテーマに開催されました。その中で、教育的かわりができるためには、学習者を理解し、その状況に合わせて共に考えていくという教育的関心が必要であり、そのためには、看護基礎教育の中で看護学生の教育的関心を育むこと、病院全体に教育的関心を育成するような組織文化を醸成することが重要であるとの説明がありました。そして、院内の教育全体を担う教育責任者の育成とともに、実際に現任教育を企画・運営する組織（教育委員会など）のメンバーの育成が鍵となるとの指摘もありました。このような人材育成は、これまで主に院内の研修や職能団体などの研修を中心に展開されてきましたが、今回の講演の中で看護大学・大学院が持つ教育的な機能を活用する人材育成について具体的な提案がありました。その結果、9 割弱の参加者から肯定的な評価を得ることができ、さらに今後の大学・大学院が持つ教育的な機能を活用した人材育成についても大きな期待が寄せられました。

これらの多くの期待を受けまして、平成 27 年度におきましても看護師の人材育成をテーマに、大学・大学院が持つ教育的な機能を活用した具体的な人材育成の在り方について、下記のとおりセミナーを開催することと致しました。

②セミナーの開催内容について

平成 27 年度のフロンティアセミナーは、12 月 19 日（土）13 時より、日本赤十字看護大学 201 講義室で開催されました。参加者は、現任教育に携わる看護師、看護基礎教育に携わる大学の教員、大学院生等で、70 名の参加がありました。

最初の基調講演では、本学看護教育学領域 佐々木幾美教授より「現場で教育に関わる看護職者育成における大学と病院の協働」と題して講演がありました。講演では、現任教育を企画・運営する組織（教育委員会など）のメンバーを育成するために、どのように看護大学・大学院が持つ教育的な機能を活用するのか、具体的な大学と病院との協働のタイプを提示し、それらの実践を紹介しながら、様々な可能性を提示して頂きました。

次に、日本医科大学武蔵小杉病院 認知症看護認定看護師 窪田裕子さんより「急性期病

院における現任教育プログラム『高齢者看護コース』の立案」をテーマに実践報告がありました。窪田さんは急性期病院における「高齢者看護」の現任教育を企画・運営する組織（教育委員会など）のメンバーとして、「高齢者看護」のコース立ち上げの必要性は理解できるが、どのようなコースを、どのように立ち上げればよいのか課題を抱えていました。そこで、以前に認知症認定看護師教育課程で教育を受けた日本赤十字看護大学に相談し、その経緯について発表をされました。

さらに、本学の老年看護学 坂口千鶴より「急性期病院における現任教育プログラム『高齢者看護コース』立案への大学の支援」とのテーマで講演を行いました。窪田看護師より相談を受けた老年看護領域では、領域内での教育活動や研究において急性期病院における高齢者ケア、特に認知症高齢者への認定看護師の活動について課題があることがわかっていたので、修了生への何らかの支援の必要性を感じていました。そこで、「高齢者看護」の現任教育を企画・運営する組織（教育委員会など）のメンバーに対して、「高齢者看護」のコース立ち上げへの支援を行うことにし、その経緯について発表をしました。

実践報告の終了後、参加者の隣同志 5～6 名で 1 グループとなり、看護師の現任教育における課題について話し合いを行いました。各グループで話し合った内容について全体で発表し、佐々木教授、実践報告者等よりコメントを頂きました。

③セミナーの評価について

セミナーの参加者のうち 50 名からアンケートが回収され（回収率約 71%）、「良かった」「とても良かった」と回答した参加者が 8 割以上でした。また、「今後の希望テーマについて」の問いに（自由記載）、「地域連携」「実習病院との連携」「実習指導者研修プログラムの実際」「教育プログラム立案」等の回答がありました。「その他」では、「具体的な取り組みが聞けてとても参考になった」「臨床と教育機関の連携は本当に大事だと思う」「このような学びの場があるのは有意義です」等の感謝の言葉が多く聞かれました。

今後、現任教育における大学の役割は大きくなると思われ、3 年間に渡る「大学と病院との連携」を中心テーマに開催してきたフロンティアセミナーの実績を、フロンティアセンターにおける継続教育コース開設（continue education course）につなげていきたいと考えております。

資料 1. 平成 27 年度 フロンティアセミナー アンケート結果

回収アンケート枚数 50 枚 (事前申し込み (学外) 者 39 名, 参加者 70 名, 回収率 71%)

1. 回答者の所属 :

- ①病院職員 35 名 ②専門学校教員 0 名 ③短期大学教員 0 名
④大学教員 7 名 ⑤大学職員 0 名
⑥その他 (院生) 5 名・(学生) 1 名・(施設職員) 1 名・(無記入) 1 名

2. セミナーを知った情報源

- ①チラシ・ポスター 16 名 ②セミナー案内 25 名 ③本学ホームページ 6 名
④友人・知人 5 名
⑤その他 4 名 (研修・臨床指導者講習会時の案内・メール、上司のすすめ)

3. セミナーの内容について

N=50

	とてもよかった	よかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった	未記入
基調講演	26 名	21 名	3 名	0 名,	0 名	0 名
実践報告	21 名	18 名	4 名	0 名	0 名	7 名
セミナー全体	22 名	23 名	2 名	0 名	0 名	3 名
会場設備	19 名	23 名	6 名	0 名	0 名,	2 名
スタッフ	23 名	26 名	1 名	0 名	0 名	0 名

マイクの音が少し聞きづらかった 1 名

4. 今後の希望テーマについて

- ・急性期病院の看護師が地域に出掛けるためには？
- ・教育プログラム立案
- ・地域連携
- ・地域における CN の活動の実際
- ・CN と地域連携の広がり
- ・CN の活動状況 (手当や活動時間、過ごし方など)
- ・実習指導者研修プログラムの実際について
- ・実習病院との連携、協働について (実習運営上の取り組み)
- ・共有・共に学び、共に成長していく組織風土を作るにはどうしたら良いか
- ・看護が嫌いにならないための教育とは (好きになるには目標が高いので、最低限のところで)
- ・勉強したくない人に研修に参加してもらう方法

5. その他、ご意見・ご感想・お気づきの点

- ・資料が裏表の両面でなく見やすく良かった。
- ・前回も今回もとても勉強になった。
- ・一部のみ参加でしたが参考になった。
- ・具体的な取り組みが聞けて、とても参考になった。ありがとうございました。
- ・自分の気づきが得られた。これからの教育プログラムの内容に役立てたい。
- ・今後、自分の施設でどのように課題を見つけるか枠組みを知ることができ、向き合う基盤ができたと思いました。ありがとうございました。
- ・所属している施設にもたくさんの研修があるが、毎年同じ内容をしていたり、先輩看護師が古いカリキュラムで企画運営している状況です。大学と協働することで、よりホットな内容や根拠のある内容になる一方で、さらに企画スタッフは実践に専念できるのだと思いました。
- ・臨床と教育機関の連携は本当に大事だと思う。
- ・困った時は一人で悩まず、他へ発信していくことで道が開けるのだと思った。
- ・このような学びの場があることは有意義です。今回参加された方（CN）はレディネスの点で、今回のテーマ以外のところ（自身の活動）について、課題を持っていらっしやることが伺えた。日赤の看護は他施設から見ると、信頼されていることを実感した。大学と病院が教育について人事交流を行いながら進めていけたらよいと思う。
- ・コースの評価、コースの影響について（どのように評価していくのか）、指標や方策が知りたい。
- ・現場はつい速効性のある答えを求めてしまうが、対象者の理解を深め、理論を知ること、実践に結び付けられるサポートを期待しています。
- ・急性期病院として悩んでいるテーマであり、とても興味を持って参加することができた。明らかなアウトカムにはできないが、ナレッジマネジメントの重要性を感じた。教育機関と連携し、質の向上に貢献していきたい。
- ・同じ認知症看護認定看護師として働いています。スタッフの良い気づきやケアにつながっていることが、主任に意見を否定されてしまったことがあります。日頃から管理者にも知ってもらいたいなと思っており、体系化されたこのような取り組みが、理解し導入してもらえよう、看護部に訴えかけていきたいと思います。
- ・セミナー開催ありがとうございました。私も悩んでいます。できればご相談させていただきたいと考えておりますので、今後ともよろしく願いいたします。
- ・来年にも期待します。

資料 2. フロンティアセミナー ポスター

日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

平成27年度 フロンティアセミナー



シームレスな人材育成をデザインする (Part III)
～現場で教育に関わる看護職者育成における大学と病院の協働～

日 時: 平成27年12月19日(土)13時～16時

場 所: 日本赤十字看護大学 201講義室

参加費: 学内の教職員、大学院生、学生は無料

I. 基調講演: 13:00～13:40

「現場で教育に関わる看護職者育成における大学と病院の協働」

講師 佐々木幾美(日本赤十字看護大学 看護教育学教授)

II. 実践報告: 13:40～16:00

1. 「急性期病院における『高齢者看護コース』立案上の課題」

講師 窪田裕子(日本医科大学武蔵小杉病院 認知症看護認定看護師)

2. 「急性期病院における『高齢者看護コース』立案への大学の支援」

講師 坂口千鶴(日本赤十字看護大学 老年看護学教授)

3. ディスカッション



◆問い合わせ:
〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学
地域連携・フロンティアセンター
TEL:03-3409-0875

後援: 日本赤十字看護大学同窓会

2) スキルアップセミナー部会

平成 27 年度より、認定看護師スキルアップセミナーを年 1 回開催することとなり、第 1 回目のセミナーが平成 28 年 2 月 26 日に開催された。

地域連携・フロンティアセンターにおける認定看護師教育課程は、平成 26 年度をもって休止となった。これを受けて、閉講となった認定看護師教育課程 3 領域「糖尿病看護」「認知症看護」「慢性呼吸器疾患看護」の修了生へのフォローアップを行う意味合いから、企画されたのが、認定看護師スキルアップセミナーである。

当日は、本学の認定看護師教育課程修了生のみならず、全国各地、様々な領域の認定看護師も含む 351 名が受講した。

午前のプログラムは、初代フロンティアセンター長として認定看護師教育課程にも深く関わってこられた川嶋みどり先生（日本赤十字看護大学名誉教授）による基調講演「看護が誘導する新たな病院文化－安全性と安楽性（尊厳）の両立－」が広尾ホールにて行われた。病院医療のあり方について、様々な現場の様相を紹介しながら、「看護本来の立ち位置からあらためて現状を見直し、認定看護師という専門職としてよりよい看護実践を誘導していこう」と呼びかける川嶋先生の講演は、刺激的で、なおかつ慈愛に満ちた内容でもあった。

午後は、3 コースがコースごとに別れての分科会形式で、講演、実践報告及びグループディスカッションというプログラムで、それぞれの会場で活発な意見交換が行われた。

さらに、セミナー修了後には、糖尿病看護コース修了生の「認定看護師同士、領域をこえた交流の場をもとう」という呼びかけのもと、交流会として茶話会が企画され、大学 1 階の学生食堂クラナドにて開催された。鶴田恵子センター長の挨拶で始まった茶話会は、同窓会のような雰囲気が醸し出されるアットホームな会となり、総勢 183 名のセミナー受講者が参加し、大盛況であった。

平成 28 年度のスキルアップセミナー開催日は、平成 29 年 2 月 25 日に既に決定している。今年度以上に充実したセミナーを提供すべく、平成 27 年度参加者のアンケート結果を参考にしつつ、企画準備を始めている。

平成27年度 日本赤十字看護大学
地域連携・フロンティアセンター Frontier Center

認定看護師のためのスキルアップセミナー

日時：平成28年2月27日(土)11:00~15:30 (受付開始10:30~)

会場：日本赤十字看護大学 広尾キャンパス 広尾ホール (東京都渋谷区広尾4-1-3)

午前の部(11:00~12:00):基調講演

「看護が誘導する新たな病院文化・安全性と安楽性(尊厳)の両立-」

講師：川嶋 みどり(日本赤十字看護大学 名誉教授) 座長：鶴田恵子

午後の部(13:00~15:30):コース別セミナー ★下記のいずれかのコースを選択してご参加ください。

1. 糖尿病看護コース

講演13:00~14:00 テーマ「糖尿病看護のこれから~私たち認定看護師に求められていること~」

講師：河口てる子(日本赤十字北海道看護大学学長)

座長：今野康子(日本赤十字社医療センター)

実践報告とグループディスカッション 14:00~15:30

「療養指導外来立ち上げに向けて~病棟と外来それぞれの立場を経験して~」

山本真貴(関西医科大学附属枚方病院)

「糖尿病看護と在宅看護を繋げる支援の現状と課題」

町田景子(公益財団法人東京都保健医療公社多摩北部医療センター)

助言者：今野康子(日本赤十字社医療センター 糖尿病看護認定看護師)

2. 慢性呼吸器疾患看護コース

講演13:00~14:10 テーマ「COPDの身体活動性維持のための包括的呼吸リハビリテーション」

-効果的な支援に向けた連携、(慢性呼吸器疾患看護認定看護師の)活動への期待-

講師：武知由佳子(いきいきクリニック 院長)

座長：多田香代子(大森赤十字病院)、岩永千佳(順天堂大学医学部付属浦安病院)

実践報告と全体ディスカッション 14:10~15:30

「呼吸ケア看護外来活動報告~開設から現在の活動状況~」 北川美奈(埼玉医科大学病院)

「慢性期RSTラウンドの現状と課題」 結城ちかこ(長岡赤十字病院)

助言者：村田亜夕美(前橋赤十字病院 看護師長・集中ケア認定看護師)

3. 認知症看護コース

講演13:00~14:00 テーマ「認知症看護における急性期病院と地域との連携・課題について」

講師：小栗 智美(日本医科大学付属病院)

座長：狩野英美(公立大学法人 山梨県立大学 看護実践開発研究センター)

：岩本由美子(社会福祉法人 よつば会 特別養護老人ホーム生田広場)

実践報告とグループディスカッション 14:00~15:30

「地域と連携した認知症の知識・看護向上の取り組み」

-当院で開催した認知症サポーター養成講習を通して- 岡田 朋子(名古屋第一赤十字病院)

「その人らしくあり続けるために -現状報告と地域から望むこと-」 久保智巳(デイサービス なごみの家)

助言者：上野優美(横浜市立みなと赤十字病院 認知症看護認定看護師)

認定更新時のポイントとして申請することができます。セミナー受講修了後に修了証発行いたします。

◆申し込み方法：住所、氏名、所属先名、参加希望テーマの番号(午後の部)を下記のメールアドレス、または下記FAX番号宛てに送信してください。

◆E-mail アドレス： skillupseminar@redcross.ac.jp ◆FAX 番号：03-3409-0589

◆参加費：5,000円 次の口座にお振り込みください。振込確認後に受講票を発送します。

振込先：三菱東京UFJ銀行 渋谷中央支店 店番：345 普通預金 口座番号：1267503

口座名義：日本赤十字看護大学(ニホンセキジユウジカンゴダイガク)

参加費は、受講する方のお名前でお振り込みください。所属先名で振り込んだ場合、受講票がお手元に届かない場合があります。

◆問い合わせ先：日本赤十字看護大学 電話 03-3409-0924(事務局担当：小暮)

◆申込締切：平成28年1月30日(土)

3) 実習指導者研修部会

看護学実習は看護基礎教育において重要な学びの場であり、臨地実習で学生が効果的に学習するためには、学生指導における看護基礎教育機関と臨地実習施設の協働と連携が重要である。そこで、赤十字の理念を基盤とした「ケアしケアされる」体験をすることの大切さや本学の実習目的を反映させた、特色のある実習指導者研修を、学内の実習委員会のメンバーと赤十字系の施設メンバーが主体となり企画・運営することになった。

平成 25 年度、26 年度と実施を重ね、研究的取り組みにより教育効果が認められ、平成 27 年度から「地域連携・フロンティアセンター」による事業となった。

①実習指導者研修会の目的と基本方針

目的は①本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる ②大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする ③実習での「ケアしケアされる」という体験を通して、学生が 4 年間にわたり成長していけるような指導体制を構築する である。

基本方針は以下のとおりである。①大学と実習施設とで協働して企画運営をする。②大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の機会を持てるような場とする。③「人を育てる」観をはぐくむ場のひとつを提供する。④研修会を受けた人には「日本赤十字看護大学 実習指導者研修会 認定証」を発行する。

企画会議メンバー構成は、日本赤十字社医療センター1名、武蔵野赤十字病院1名、大森赤十字病院1名、横浜市立みなと赤十字病院1名、葛飾赤十字産院1名、日本赤十字看護大学10名（事務局1名含む）であり、このメンバーで企画・準備・運営を行っている。

②プログラム内容

プログラムは、1) 理論、2) 演習・実践、3) リフレクション にて学びを深められるように構成されている。また希望者には4) 見学オプションも用意している。1)～4)は5月～翌1月の半年で修了できるように組まれており、平成 27 年度の大学開催は、6月15日、8月4日、8月5日、11月25日、平成 28 年1月26日の計5日であった。

(1) 理論

本学の教育理念や実習を理解するために必要な本学の教育課程や実習指導概論、現代の学生の特性を理解した指導を目指すために重要な教育心理、対人関係論や教育方法論などを計9コマ設けている。大学で実施しており1コマごとに聴講が可能であるため、研修参加者のみならず、実習施設のスタッフや大学院生（TAを含む）、若手教員の受講者も多くみられる。

(2) 演習・実践

演習はグループワークで行い、講義の内容を生かし実際の実習指導で系統的で具体的な指導案を計画し実践・評価できるよう、事例をもとに学生指導計画をグループ毎に立案する。事例は、領域毎に作成し、学年に応じた事例設定を設けることで、よりリアリティーのある指導計画立案につながるように配慮している。また、系統的な指導を目指し、指導の大枠を検討するための週案、次に詳細な指導を検討するための日案の両方を作成できるよう仕組み化されている。企画委員および教員はファシリテーターとして随時グループワークに参加し、疑問の解消やより具体的な指導案を作成できるよう共に考えファシリテートするよう配置をしている。

実践は、各参加者が臨床の場で実際に学生指導の計画立案と実施・評価するものである。実践の中で不明な点や困った点などを実践期間中に相談する機会がほしいという要望を踏まえ、平成27年度は参加者がそれまでの実習指導の途中経過や意見を共有し合うことができるよう、グループワークの機会をプログラム半ばに設けている。

(3) リフレクション

自ら実施した実習指導を振り返りリフレクションできるように、グループワークを行う。指導で留意したことや工夫した点、学生の反応や困難だったことなどを語りあう中で、自分と学生の感情の変化に気づいたり、指導者としての自分の行動を改めて見直す機会に繋がっている。企画委員および教員はファシリテーターとしてグループワークに参加して、グループ全体で考えることができるようにファシリテートしている。またリフレクションを参加者全体で深められるような看護倫理、看護管理の講義編もリフレクション後に2コマ設けている。

(4) 見学オプション

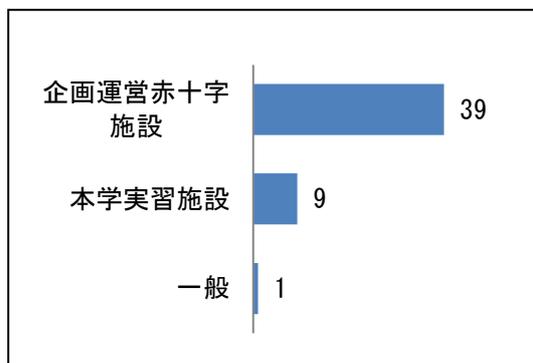
見学オプションは他施設での実習指導見学と学内技術演習見学に大別される。前者は、参加者が他施設に出向き、実習指導をしている指導者のシャドウイングをするものである。この見学は施設と領域（基礎・成人、小児、母性、老年領域）、実習学年（レベルⅡ、レベルⅢ、総合実習）を選択できるようになっており、参加者の見学目的に沿った見学ができるように配慮されている。学内技術演習見学は、参加者が大学に出向き、学生の技術演習を見学し、適宜指導に入っていただく内容である。見学領域は1年生の基礎看護学領域（フィジカルアセスメント、洗髪、清拭、寝衣交換など）、2年生の成人看護学領域（輸液療法、術後1日目のケア、呼吸器ケア）、3年生の老年看護学領域（摂食・嚥下ケア、移乗・移動ケア、排泄ケア）、母性看護学領域（新生児の観察、沐浴）である。学生の学内の様子や演習での技術習得状況を知ることで学生の特性を理解し、習得状況を踏まえた指導ができるようになることを狙いとして企画されたものである。

見学オプションは本研修会の魅力の一つとなっている。実習指導見学は他施設で行うため、指導内容のみならず指導体制や全体的な雰囲気なども学べる。学内技術演習見学では、学生の技術習得過程を知ることで、臨床での技術指導のヒントにつながったり、実習指導を行った学生と再会してその後の成長を知ることができた参加者もいる。

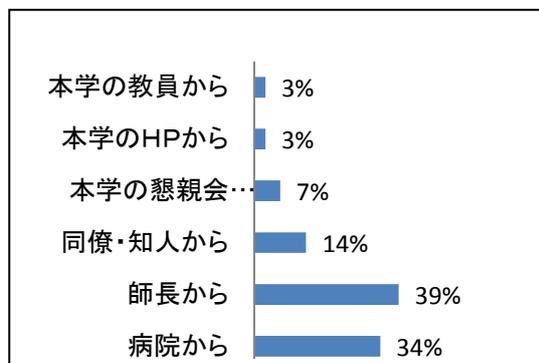
③平成 27 年度の実施状況

今年度の参加者は 49 名であった。平成 27 年度に実施されたプログラムは添付資料の通りである。学内プログラムへの評価は以下の通り、概ね良好であった。

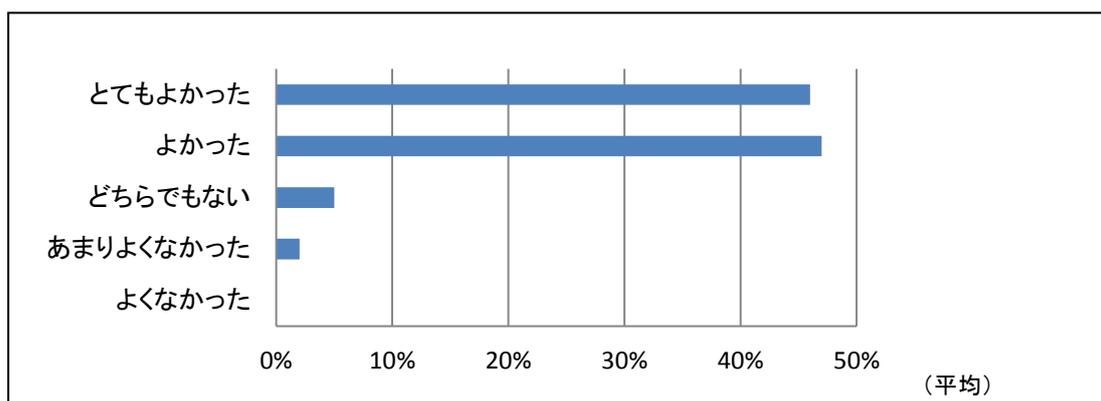
参加者の所属



Q 本研修会をどこで知りましたか



(1) 講義について



<教育原理>

- ・教育と学習についての違いがよく分かった。(4)
- ・教育原理と聞いて難しそうだと思ったが、分かりやすく興味を持てる内容だった。原理が分かりやすく学べた。(3)
- ・「生涯発達」という考えがとても興味深く、考えさせられた。
- ・具体から抽象へがとても良く理解できたし、説明もそれを踏まえてだったので、より自分の行動にあてられた。
- ・後半の講義の時間が足りなくなってしまったため、もっと詳しく聞きたかった。(9)

<教育方法>

- ・アイスブレイク、ロールプレイがあり、参加型で楽しく学ぶことができた。(18)
- ・環境デザインの重要性が分かった。新人が環境に慣れるよう工夫したいと思った。(5)
- ・看護のみでなく、一般的な教育論、教育方法を知れる機会になった。
- ・教育は内容より手法であるということが体験をもって学べた。最後の劇が本講義のまとめとなっていて、これが手法なんだと感じた。

- ・指導する側の課題に目を向ける機会になった。実際に活かせるものが多かった。(4)
- ・時間が足りなかったので、もう少し深く学びたかった。(4)

＜対人関係論＞

- ・プロセスレコードから、理論・振り返りの技法がよく理解できた。(8)
- ・学生、指導者、患者の三者関係のありようが、プロセスレコードの例でとてもよく理解できた。
- ・「つまづき、失敗から学んでいくことの重要性」この学びの体験の意義への理解ができた。
- ・実際の臨床で「あれ？」と立ち止まりそうな時のことについて、考え方の方向性を学ぶことが出来た。
- ・感情知性という事が分かりやすく、とても良かった。
- ・難しい分野だと感じた。事例は自分が捉えていた違和感より重い印象だった。その「ズレ」を受け止め、考えていくことが大切なのだと思った。
- ・様々な考える材料を頂いたが、自分の中で統合や具体的に考えることが難しかった。
- ・実習指導者として、学生との関わりの難しさを感じた。(2)

＜実習指導概論＞

- ・具体的な事例の元で説明があり、イメージしやすく分かりやすかった。(11)
- ・学生 - 指導者 - 教員との関係性や学生の特徴が分かり、どのように指導していけるかを考えるきっかけになった。(4)
- ・学生が実習する上での指導者の役割や学生が主体的に学びを進めるための関わり方が理解できた。(3)
- ・臨床の場での教育を今まで考え実践をしてきたが、大学での教育と考え方が違う所もあると思った。
- ・学生だけでなく、新人教育にも応用していきたいと思った。

＜教育心理＞

- ・現代の青年の特性や様々な問題を抱えている学生や新人が増えており増えている背景を知る事ができ今後関わる上で参考になった。(10)
- ・実際に現場で困った症例もあるので、講義の内容がとても合っていて参考になった。
- ・ADHDの対応は専門家に頼らざるを得ないと思うのもっと臨床で対応できることを知りたい(外発的動機付けと内発的動機付けなど)。(2)
- ・臨床の場でどのように活かすかは課題が残った。(3)
- ・もっと詳しくゆっくり聞いてみたいと思った。

＜看護学概論＞

- ・ケアリングについて学生のときにも講義を受けたが、看護師となりいろいろな場面を思い浮かべながら聞く講義は全く意味が異なりとても面白かった。(2)
- ・後半もう少し長い講義でも良かった。ゆっくり話しが聞きたかった。(6)

- ・ケアする力の育成を通し、互いに人間的に成長という所がとても心に響いた。組織の文化ということも考えさせられ、もっと改善の余地があるのではと思った。
- ・日々行っている自分のケアを振り返って考えることができてよかった (4)
- ・ディスカッションもあり分かりやすい講義だった。ボリュームがあり全て聴けないのが残念だった。
- ・新人・学生指導をする上で最も伝えたいことや考えたいことの内容だった。

<看護倫理>

- ・学生の倫理観を育てるためには実習での経験がとても重要だと感じた。(8)
- ・学生指導に対してだけでなく現場スタッフとして仕事を行ううえで大切な「看護倫理」の内容だった。看護倫理について具体的な事例を元に講義をしていたため理解しやすかった。(3)
- ・医療安全が重視されており、学生も体験したくてもできないケアや技術も多いが、現場でしか学べないことは多くあるので学生が学べる機会をたくさん作ってあげたい。(2)
- ・話を聞く、話し合うという言葉が辞書にない医師とコンセンサスを取る努力に疲れ、時々聴こえないふりをしていた私ですが、刺激を受け、昔のように“力”を出してみようと思った。
- ・専門職としての責任、現状に満足するのではなく問題点にも目を向けることが大切だと分かった。
- ・学長という立場の方の考えを知ることができ、今の学生がどういう考えの方々の元で学んでいるのか知れた。

<看護管理>

- ・看護や医療の動向をわかりやすく知ることができてよかった。(18)
- ・未来の看護師がどうなってほしいか考えながら見本を見せたい。
- ・実習において学生に何を期待するか改めて考える機会となった。(2)
- ・看護師、1人の医療者を育てることの難しさや責任を感じた。(3)
- ・先生の実体験を交えながらの講義はとてもわかりやすく、興味深かった。(9)
- ・看護師として何を求められているのか、看護の意味とは何かを改めて考える機会となった。(2)

(2) 演習・実践について

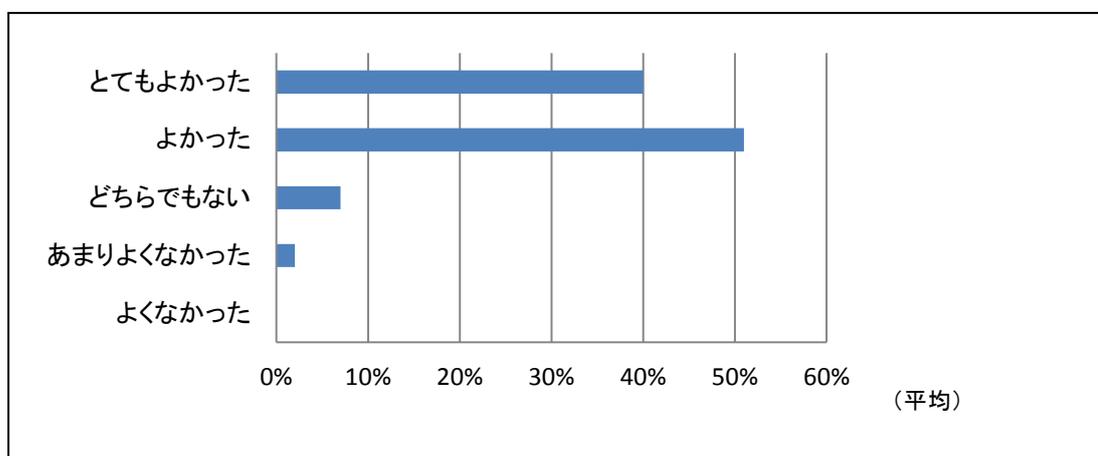
Q. 作成した指導案をもとに実習指導を展開してみているか。

- ・目標と方法と評価、自分自身、学生が明確になった。(6)
- ・自分の指導の振り返りとなった。客観的に見つめ直すことができた。(16)
- ・具体的な指導方法を考えて意識して指導に臨む事が出来た。(4)
- ・実際の学生とイメージしていた学生像にズレ、自分が予測していた反応が得られなかったりした場合に修正するのが大変だった。どこまで助言すればいいのかなど悩んだ。(3)
- ・リアルタイムで指導案を作成することは難しいと思った。期間的に週案で展開すること

は難しく、日案を後追いで記入した。学生も同じように日案、週案のようなものを出してくれると一緒に平行し進めることができるのではないか。(6)

- ・日々の指導がスムーズになった。1週目・2週目とどのレベルまで求めるか明確になった。(3)
- ・人に指導することの難しさを感じた。(2)
- ・指導案通りに進まないがその都度評価修正して対応することで、その日の目標を意識して指導にあたることができた。後付けでも、整理が出来、また次のクールの実習へつなげる事が出来た。(2)
- ・指導案を基に展開する機会がなかった。実習要項も見れて、一目でわかるようなスタイルで共有すると指導者間でも共有しやすいかもしれない。(3)

(3) リフレクションについて



- ・他施設の状況や自分が経験できないようなこと、難しかった例、うまくいった例、病棟、外来等を共有・ポジティブフィードバックすることができた。(12)
- ・質問やディスカッションをしながら学べるのはとても有意義だ。(7)
- ・他の指導者も同じような疑問やまた、とまどいを持って指導している事がわかり、力になった。
- ・病棟でいかしてみたい。(7)
- ・他施設の状況を知ることで参考になった。新たな視点が見えた。(19)
- ・悩みも相談できてアドバイスを頂けて助かった。解決策を見出せた。(8)
- ・自己の関わりを振り返ることができた。(2)
- ・学生の気持ちや状況を理解する機会ができた。
- ・時間配分ができていないことで全員の演習発表ができず、振り返りできなかったことが残念。自分の指導があっていたのか、自分で振り返れたが他者の意見もききたかった。
- ・ずっと同じグループで話してきたので、意見が言いやすかった。

(4) 見学オプションについて

<学内技術演習見学>

- ・学生がどのような授業を受け実習に臨んでいるのかがわかりよかった。(8)

- ・実習中とは異なる学生の姿を見ることができた。(3)
- ・学生の身だしなみの乱れが気になった。(2)
- ・学校側が事前に物品が準備されているなど、準備片付けはしなくていいのかと疑問を感じた。(2)
- ・学内での演習から実習では学生がリアリティショックを受けるのもよくわかった。
- ・他施設の学生さんの動向や様子が見れてやはり各校のカラーがある、ということは指導や目標も変わると感じた。
- ・実習が実際のケア手順と同じことを知り、指導場面でもフォローしていけると思った。
- ・学生には自信を持ってケアを実施してほしい。

<実習指導見学>

- ・他施設の実習指導を見ることができ参考になる部分も多く、よかった。(19)
- ・見学を通じて感じた良いところは自部署でも取り入れていきたい。(6)
- ・総合実習のイメージができた。
- ・自分の病院の他の階へ見学も行きたい。
- ・1日指導者についていくため負担になっていないか申し訳ない気持ちもあった。
- ・1人で4～5人の学生をとらえて担当のPtとのケアを合わせていくのが大変だった。
- ・実習指導を客観的にとらえることが出来た。

(5) 実習指導者研修会への意見や感想など

- ・とても面白く、興味深い講義だった。
- ・実習指導見学はあった方がいい。
- ・ディスカッションがとても充実していた。(2)
- ・書き方をより深く理解することができるよう、日案・週案を作成方法を講義で詳しく知りたかった。
- ・教育方法の講義はいろんな学生がいるのもう少し濃い内容を聞きたかった。
- ・とても勉強になった。(3)
- ・最近の学生の傾向や学習場面などが知れる機会があると良い。
- ・今回のように様々な場面を見せてほしい。
- ・実際の指導をすでに行っている人とほとんど経験のない人では求める内容が違ってくると思うので、グループワークのときなどにできたら分けてもらいたい。
- ・統合・総合実習の意図やそれを行うことによる学生の変化をより具体例を含めて知りたい。

平成26年度にあがった運営上の課題は①経済的基盤の確保、②他施設実習見学の時間的配慮、③研修会修了生へのサポート体制の検討であった。①については、基本的に参加費を徴収して運営することとした。赤十字関連施設からの参加者には日本赤十字看護大学同窓会および日本赤十字社看護師同方会からの支援をいただくことができたので参加費に反映させた。②についてはそれぞれの施設において、見学受け入れ可能な時期をあらかじめ施設に確認することで調整を図った。また実習指導見学は原則1日とした。③につい

ては来年度に向けて修了者向けのフォローアップの企画を検討することになった。

④今後に向けて

次年度に向けた方略として①修了者向けのフォローアップ企画の具体化、②参加者募集方法の拡大、を検討している。①に関しては、平成 28 年度の第 4 回の指導者研修会と同日の午後に開催する予定になっている。講義の内容等は講義候補者の予定等を確認しながら検討する。②に関しては、研修参加者の募集は赤十字施設や実習施設のみならず、近隣の病院等にもポスターを配布すると共にホームページでも行うことになった。



平成 27 年度 実習指導者研修会の日程と内容

日時		科目	教育内容	担当	場所
平成 27 年 6 月 15 日 (月)	10:00-10:30	開校式			大学
	10:40-12:10	教育原理	教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観など	山崎裕二先生 (本学准教授)	
	13:10-14:40	《特別講義》 教育方法	状況に埋め込まれた学習(状況的学習論:正統的周辺参加論)	有元典文先生 (横浜国立大学教授)	
	14:50-16:20	対人関係論	実習場面での対人関係スキル、アサーティブな自己表現など	小宮敬子先生 (本学教授)	
8 月 4 日 (火)	9:00-10:30	実習指導概論	実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法など	佐々木幾美先生 (本学教授)	大学
	10:40-12:10	教育心理	人間の発達、学習過程における心理、学生の特性、状況的学習論など	遠藤公久先生 (本学教授)	
	13:10-14:40	各領域実習の 実際	各領域実習の目標 (領域毎;選択制にする)	企画委員会	
	15:20-16:20	実習指導の 実際(演習 I- 1)	8-9 月または 10 月の 実習指導案を作成 (Group Work)	企画委員会	
8 月 5 日 (水)	9:00-10:30	看護学概論	ケアリング	守田美奈子先生 (本学教授)	大学
	10:40-16:20	実習指導の 実際(演習 I- 2)	8-9 月または 10 月の 実習指導案を作成 (Group Work)	企画委員会	大学
8 月-10 月	8:30-16:00	実習指導に 関する実習	実習指導を実施し、 その中で計画案を展開	企画委員会	各施設
11 月 25 日(水)	9:00-10:30	自己学習(実習指導のリフレクション)			大学
	10:40-12:10	《特別講義》 看護倫理	看護と倫理、実習指導と倫理	高田早苗先生 (本学教授)	
	13:10-14:40	《特別講義》 看護管理	看護・医療の動向と実習	鶴田恵子先生 (本学教授)	
	14:50-16:20	自己学習(実習指導のリフレクション)			
平成 28 年 1 月 26 日 (火)	9:00-12:10	実習指導の 実際(演習 II)	実際の実習指導をリフレク ションし、事例検討を行う (Group Work)	企画委員会	大学
	13:10-14:40	修了式・閉講式			

2. 地域連携部門

1) ケアリング・フロンティア広尾

巻末の資料参照

2) リサーチ・フェスタ

平成 27 年 11 月 5 日（木）18 時 10 分から 19 時 30 分に、日本赤十字看護大学広尾ホールにおいてリサーチ・フェスタを開催した。リサーチ・フェスタは、医療・福祉施設が連携し、研究や教育の質を高め、よりよい実践をおこなっていくことを目指し、今回で第 3 回目の開催である。日本赤十字社医療センター、葛飾赤十字産院、日本赤十字看護大学などから看護職、教員、学生など 85 名が参加した。また、本年度はスイス・ラソーヌ大学から来日中の Christophe 教授も出席した。ポスター展示・発表による一般演題 26 題、日本赤十字看護大学助成金による奨励研究・海外研究活動・ケアリング・フロンティア広尾の活動報告 11 題の計 37 演題の応募があり、研究交流・情報交換が行われた。研究よろず相談（リサーチ・カフェ）では、日頃の研究に関する疑問などをもって訪れる人の姿もみられた。参加者からのアンケート結果をみると、楽しい雰囲気の中で活発な交流ができたとの反応であった。平成 28 年度も 11 月に開催を予定している。



ポスター展示・発表



研究よろず相談（リサーチ・カフェ）

ケアリング・フロンティア広尾 日本赤十字看護大学研究支援委員会 共催 赤十字リサーチフェスタ2015

赤十字リサーチフェスタで、関心領域が近い人との仲間づくり（実践と研究をつなぐネットワークづくり）をしてみませんか

- 日時：平成27年11月5日（木）18:00～19:30
- 場所：日本赤十字看護大学 広尾ホール
- 参加者：赤十字施設で働いている医療従事者、教職員
- 参加費：500円（資料、茶菓代）

リサーチフェスタ の 内容

(1) 研究よろず相談（リサーチ・カフェ）

「臨床で研究に取り組みたいが、研究テーマをどうやって探せばよいか？」など、日ごろ疑問に思っていることを、相談してみませんか。「個別相談」「グループでの相談」どちらも大歓迎です。

(2) 研究交流（ポスタープレゼンテーション）

研究内容をまとめたポスター（すでに発表したもので良い）を掲示し、交流する企画です。研究テーマを記載したマップを配布しますので、そこで待機している発表者と自由に交流をして、ネットワークづくりに役立ててください。

「一般ポスター発表コーナー」の他、「ケアリング・フロンティア広尾 活動報告コーナー」「日本赤十字看護大学奨励研究賛助成研究コーナー」「日本赤十字看護大学教員の海外研究活動助成コーナー」を設けます。奮ってご参加ください。

● 申し込みについて（発表者、参加者）

申し込みについて（発表者、参加者）

申し込み先：researchifesta@redcross.ac.jp

氏名（フリガナ）・所属・連絡先e-mail

発表者は、研究テーマもお知らせください。

発表者申込締切：平成27年10月16日（金）17:00

参加者申込締切：平成27年11月5日（木）当日受付可

*発表者は、当日の18:00までに、90cm×120cm以内のポスターを掲示してください。発表者は、当日決められた30分程度ポスターの前に立ち、参加者とディスカッションをしてください。

不明点があれば、下記まで、問い合わせてください。

問い合わせ先：researchifesta@redcross.ac.jp



資料5 「リサーチ・フェスタ 2015」実施結果

I. 参加状況 総出席者数 85名 アンケート回収数 23名 (回収率 27.1%)

所属	職業 (複数選択者あり)
日本赤十字看護大学.....15名	教員.....8名
葛飾赤十字産院.....5名	看護師.....6名
日本赤十字社医療センター.....2名	助産師.....5名
その他.....1名	大学院生.....5名
	保健師.....2名

II. どのように知ったか (複数選択者あり)

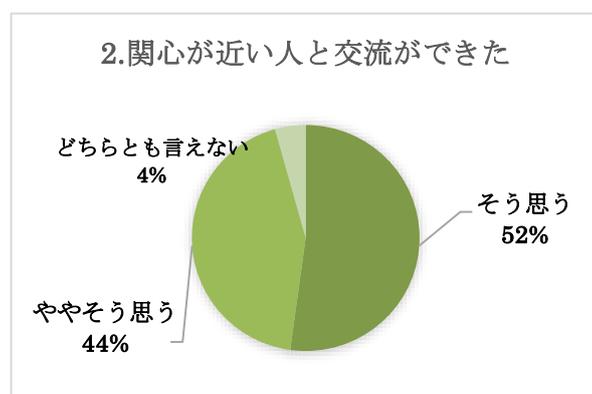
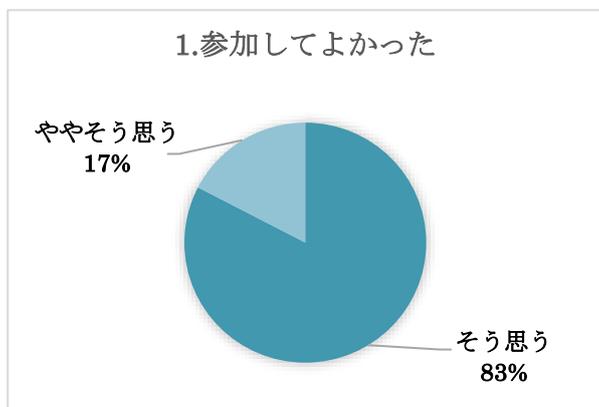
ポスター.....10名
案内メール.....9名
大学ホームページ...1名
その他.....9名 (学内での案内...1名、友人の誘い...2名、上司の薦め...1名院内メール...1名)

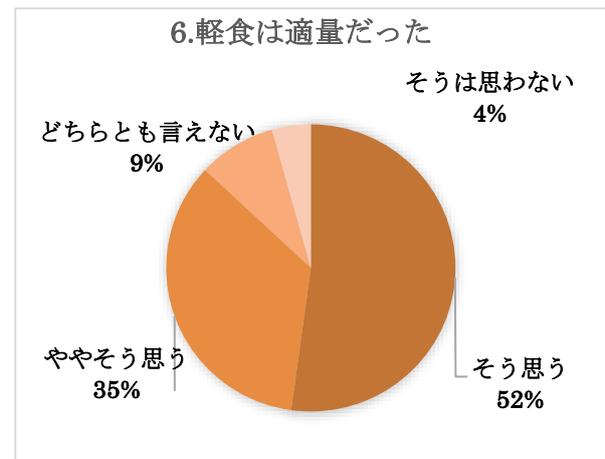
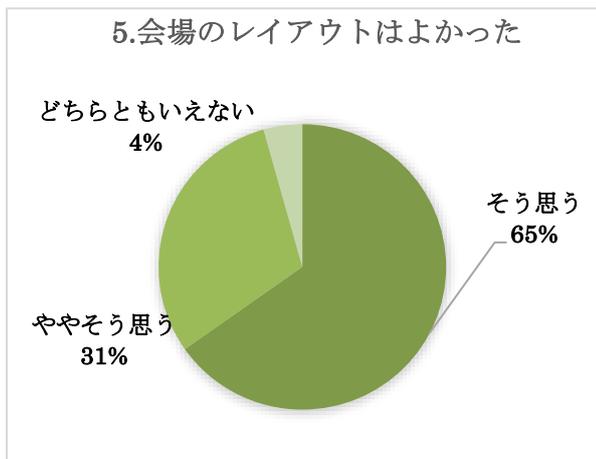
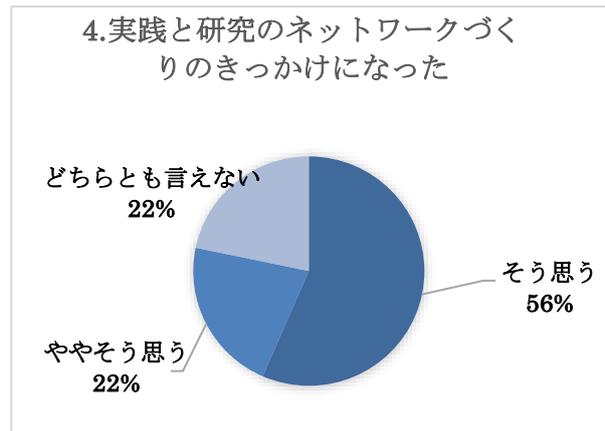
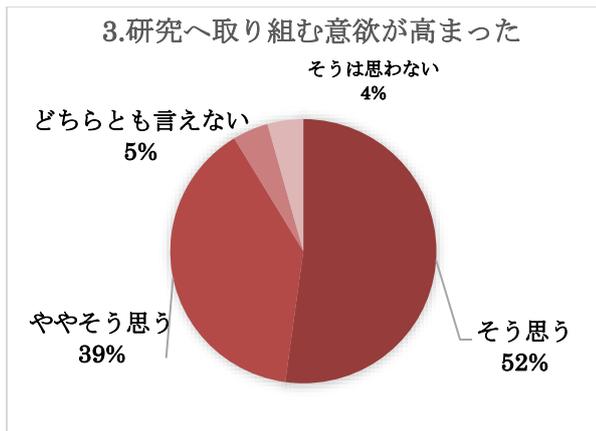
III. 参加理由

興味のあるポスター・プレゼンテーションがあったから.....9名
ポスター発表をしたから.....5名
リサーチカフェ (研究よろず相談)1名
ケアリングフロンティア広尾活動報告に興味があったから...1名
日本赤十字看護大学奨励研究の発表をしたから.....1名
興味のある日本赤十字看護大学奨励研究があったから.....1名
その他.....2名

(研究方法等、自分で行う研究につながる情報があったため)

IV. 参加後の感想





自由記載欄

1. 今後に向けてのご希望

- ・ 60分くらいのプログラムでもよいかもしれません
- ・ 自己の反省として共同研究者と取り組んだ研究と掲示場所や時間が分かれてしまいました。申し込む際に連番になるよう申請しようと思いました。
- ・ めんたいマヨネーズの食べ物が多かったような気がしました。

2. 感想

- ・ 直接研究者から話がきけて良かった
- ・ 大変参考になりました ありがとうございます
- ・ よろず相談でたくさん相談にのっていただきました 研究に活かしていきたいです
- ・ 全体的に興味深いものが多くたのしめました ありがとうございます
- ・ 準備、実施ありがとうございました
- ・ 楽しい雰囲気でした
- ・ 分野の異なる研究者の研究の話が聞けて楽しかったです
- ・ 臨床の方が現在取り組んでいるポスター発表を聴き交流ができてとても良かったです

3. 災害看護部門

1) 武蔵野市地域防災活動部会

地域防災活動ネットワークは、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の平成 16 年より始まった。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することをねらいとし、平成 27 年度で 13 年である。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、年間約 10 回（平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月）の防災ボランティアセミナーを開催した。セミナー会場は、本学武蔵野キャンパスおよび武蔵野市民防災協会である。セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々に拠出している。企画メンバーは本学教員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、大学教員、近隣の病院所属看護師と多岐に渡る。更に本学の学生災害救護ボランティアサークルがメンバーとして一緒に企画運営に加わり、住民と共に地域防災に関する学習や交流に取り組んでいることが特徴である。また、本学学部 1 年生の必修科目「災害看護論 I」の授業の一部を本セミナーへの参加に当てている。本学学生は、プログラムの中からテーマを選択しセミナーに参加、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学習に取り組んでいる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは、意義が大きい。

各回セミナーの参加人数は 33～78 名と幅があるが、地域住民および本学学生を合わせ、平成 27 年度の全 10 回のセミナー参加者延べ数は 473 名であった。

武蔵野市との地域防災に関する協定締結の取り組み

今までの本地域防災活動ネットワークの実績から、本学と武蔵野市との地域防災に関する協定締結に向けて協議を行い、2016 年 1 月 1 日付で締結の運びとなった。

本協定は、本学と武蔵野市の連携のもと、地域の防災課題に対応し、強固な防災地域社会の形成と発展に寄与することを目的とし、目的を達成するために相互の協議の下で必要な取組を実施、連携及び協力の具体的内容及び成果の活用その他必要な事項について、その都度協議して定めるものとする等が協定書に記されている。

2016 年 3 月 5 日第 10 回セミナー「東日本大震災、5 年の歳月、鎮魂に向けて」を開催

第 10 回セミナーは東日本大震災後 5 年という日を迎え、記念講演会及びシンポジウムを開催した。メインテーマは、「東日本大震災、5 年の歳月、鎮魂に向けて」と設定、記念講演のテーマは、

「病院建物の被害状況と管理運営調査結果より、復興のあり方を探究する」とした。東日本大震災被災地の病院建物被害状況の視察結果をふまえ、大規模災害に対応した保健・医療・福祉サービスの構造、設備、管理運営体制等について講演して頂いた。ハ

ード面だけでなく、コミュニティの1つの大きな機能として保健、医療、福祉サービスを位置づけた復興のあり方が伝わってきた。シンポジウムのテーマは、「被災者として支援者として、体験からの成長」と設定した。東日本大震災の被災者は、時として支援者でもある。自分の生まれ育った地域、愛着を持って働いていた地域の崩壊を目の当たりにし、心が傷つきながらも地域や住民を守りたいという双方の気持ちを抱きながら成長しつつあることを、外部支援者は理解し支援することが求められる。3名のシンポジストをお迎えし、被害体験、危機からの脱出、その後の人間としての成長を語って頂いた。災害からの人間的成長や外部支援のあり方等が深く考えさせられ、参加者のところに大きな感動をもたらした。参加者からのコメントを1つ紹介しよう。

「災害について向き合おうとしている人間がいるということ今回出会った方々に勇気をいただき、私自身も一歩ずつ前に進んでいこうと思います。ありがとうございました。」

武蔵野キャンパスでの最後のセミナー

武蔵野キャンパスの解体に伴い、13年に及ぶ武蔵野キャンパスでのセミナー開催は、今回で最後となった。セミナー終了後、懇親会が開催され参加者、スタッフ、SKV等31名が参加し、交流と今後の活動に向けて決意を新たにされた。今後は、従来のプログラムの取り組みに加え、本セミナーで習得した避難支援に関するスキルをもって、地域や学校また職場等での防災・減災に関する研修会や訓練等でその知識や技の普及に努め、災害発生時には地域組織のメンバーの一人として活動できる人材の育成を目指す。次年度は武蔵野市と提携して避難所活動支援協力員養成講座の立ち上げを進めていく。

第1回「防災ゲーム クロスロード」



第6回「避難所での被災者支援」



資料 6. 地域防災セミナー参加申込数

平成 27 年度 地域防災セミナー 参加申込数

1. 参加申込数

		NO. 1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6	NO. 7	NO. 8	NO. 9	NO. 10	H27 合計
一般	申込数	30	32	39	40	38	36	43	44	45	54	401
	欠席数	△3	△4	△5	△8	△8	△12	△12	△13	△11	△14	△90
	参加人数	27	28	34	32	30	24	31	31	34	40	311

学生	申込数	21	17	46	26	43	14	2	3	0	0	172
	欠席数	△1	△1	△2	△4	△0	△0	△0	△2	△0	△0	△10
	参加人数	20	16	44	22	43	14	2	1	0	0	162

一般 + 学生	申込数	51	49	85	66	81	50	45	47	45	54	573
	欠席数	△4	△5	△7	△12	△8	△12	△12	△15	△11	△14	△100
	参加人数	47	44	78	54	73	38	33	32	34	40	473

※「申込数」は事前申込と当日申込を合わせた数。

2. 男女内訳

		NO. 1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6	NO. 7	NO. 8	NO. 9	NO. 10	H27 合計
一般	男性	20	16	25	21	21	16	17	17	21	19	193
	女性	27	28	53	33	52	22	16	15	13	21	280
学生	合計	47	44	78	54	73	38	33	32	34	40	473

※欠席者は含まれない。

平成 27 年度 地域防災セミナー

災害に強くなる知恵と技

<http://www.redcross.ac.jp/frontier/index.html>



- ★開催期間 平成 27 年 10 月 17 日～平成 28 年 3 月 5 日 (月 1 回)
- ★開催場所 日本赤十字看護大学 武蔵野キャンパスB館 (武蔵野市境南町 1-26-33)
武蔵野市役所 防災安全センター (武蔵野市緑町 2-2-28)

【武蔵野キャンパス 赤示】



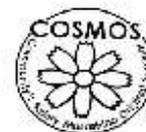
【武蔵野市役所】



- ★申込方法 裏面の参加申込書にご記入の上、各開催日の 10 日前までにお申し込みください。
- ★参加費無料 ★どなたでもご自由にご参加いただけます。
定員 (100 名程度) を超えた場合、お断わりすることがございます。

主 催：日本赤十字看護大学 看護実践・教育・研究フロンティアセンター
武蔵野地域防災活動ネットワーク (COSMOS)
Community 's Safety : Musashino Original Seminar

共 催：武蔵野市民防災協会
協 力：武蔵野市



資料 8. 地域防災セミナープログラム

日 時		内 容	会 場
H27 10/17 (土)	9:30 ～ 12:30	開講式 講話「地域ではじめる防災まちづくりのポイント」 東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター加藤孝明氏 防災ゲーム「クロスロード」～支援者のリスク管理編～	日本赤十字看護 大学 武蔵野キャンパ スB館
	13:30 ～ 16:30	講話「避難所への避難行動支援と避難所の仕組み作り」 COSMOS スタッフ 青山真市郎氏 シミュレーション「発災直後の避難支援活動」 COSMOS スタッフ 青山真市郎氏	武蔵野市境南町 1-26-33
H27 11/22 (日)	9:30 ～ 12:30	講話「避難所で健やかに生活するために」 日本女子体育大学 助友裕子氏 演習「避難所で必要な公衆衛生を学ぶ トイレなどについて」 COSMOS スタッフ 根岸京子氏	日本赤十字看護 大学 武蔵野キャンパ スB館
	13:30 ～ 16:30	講話「行政の施策の紹介」 武蔵野市健康福祉部地域支援課長 山田剛氏 講話「もっと知ってほしい災害時の障害児者支援」 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 障害福祉研究部社会適応システム開発室室長 北村弥生氏 講話「もっと知ってほしい災害時の母子支援」 COSMOS スタッフ 山本由香氏 講話「もっと知ってほしい災害時の子ども支援」 谷古裕子氏	武蔵野市境南町 1-26-33
H27 12/12 (土)	9:30 ～ 12:30	講話「安心した避難所生活を送るための要援護者トリアージ」 COSMOS スタッフ 小原真理子氏 演習「学ぼう福祉避難室振り分け区分と方法」～避難所運営ゲーム～ COSMOS スタッフ 青山真市郎氏	日本赤十字看護 大学 武蔵野キャンパ スB館
	13:30 ～ 16:30	講話「避難所での就寝体験から学ぶ」 COSMOS スタッフ 小原真理子氏 演習「あなたのお世話が心と身体を癒す」 COSMOS スタッフ 谷岸悦子氏	武蔵野市境南町 1-26-33
H28 1/23 (土)	9:30 ～ 12:30	講話「在宅避難中の被災者への支援」 ～個人の自助と専門職不在期間の集団内での自助～ 武蔵野市健康福祉部長 笹井肇氏 演習「認知症サポーター養成講座」 武蔵野赤十字病院在宅介護支援センター長 庄司幸江氏	武蔵野市役所 防災安全センタ ー 811室 武蔵野市緑町 2- 2-28
	13:30 ～ 16:30	講話「災害関連死を防ぐための医療と福祉の連携」 たんぽぽクリニック理事長 井上俊之氏 演習「災害時の疾患別備える内容」たんぽぽクリニック理事長 井上俊之氏	
H28 3/5 (土)	9:30 ～ 12:30	講話「被災者と支援者のこころのケア」 COSMOS スタッフ 山下カツエ氏 演習 ロールプレイ COSMOS スタッフ 山下カツエ氏	日本赤十字看護 大学 武蔵野キャンパ スB館
	13:30 ～ 16:30	基調講演「病院建物の被害状況と管理運営調査結果より復興のあり方を探求する」 日本赤十字看護大学 鶴田恵子氏 シンポジウム「被災者として支援者として、体験からの成長」 シンポジスト： 日本赤十字看護大学大学院修士課程 今野知穂氏 宮城県多賀城高等学校養護教諭 遠藤ゆきえ氏 仙台青葉学院短期大学看護学科 石母田由美子氏 指定発言者： 武蔵野市防災安全部部長 山本芳裕氏 閉講式	武蔵野市境南町 1-26-33

資料 9. 平成 27 年度地域防災セミナー受講生のアンケート結果概要

1. 各セミナーの受講人数

各回の参加者数は 33～78 名と幅があるが、一般住民および学生の 10 回合計は 473 名、男女内訳は男性 193 名、女性 280 名であった。

2. 年代別の受講者層

「70 代」が受講者全体の 13～33%と最も多く、次に「60 代」、「50 代」が多く参加していた。大学授業の一環として学生が参加している回では、「10～20 代」の占める割合が大きい。例年と比べ「60 代」より「70 代」が多い受講者層であった。リピーター受講者の年齢層が高くなったことが推測される。

3. セミナー受講者の居住地

「武蔵野市内」に在住の方は受講者全体の 8%～33%を占めており、例年と変わらない割合である。「武蔵野市以外の都内」の受講者が全体の 41～52%と最も多い。

4. セミナーを知ったきっかけ

「大学の授業」を除き、「本学からの案内状」で知る方が最も多かった。案内状は、主に前年度参加された方や共催および協力機関や武蔵野市の防災訓練時に配布を行った。

5. セミナー受講への動機

「災害の知識を得る、深める」、「いざという時に備えるため」、「地域防災の役に立ちたいため」を目的に受講される方が最も多かった。受講後は「在宅避難時の知識を得られてよかった」ことや「皆と話し合っって視野を広めることができた」という感想が聞かれた。

6. 各セミナーの受講者の評価

5 段階で概ね 5（非常によかった）～4（よかった）であった。主な理由は「テーマが明確」、「興味あるテーマ」、「説明がわかりやすい」であった。

セミナー運営に携わっているスタッフや学生が自らセミナー講師となり、企画から実践までを担当している。実践的な訓練を通じ、スタッフ自身の災害に対する知識や技術を高め、災害に関わる人材の育成・活用に取り組めた。また武蔵野市や武蔵野赤十字病院などの連携協力機関から講師を招聘することで、地域で行っている災害への取り組みを知る機会を提供できた。さらに高齢者および障がい者支援においては、専門知識提供者として外部講師の招聘を行い、災害時の要配慮者への理解が深まる機会を提供することができた。

2) なみえプロジェクト

本事業は、日本赤十字看護大学が浪江町と契約を結び「いわき市内に避難している浪江町民に対する健康調査事業」として平成24年10月より実施している。現在までの4年間、年度ごとに各期にわけて活動している。

第1期：平成24年10月から平成25年9月

第2期：平成25年10月から平成26年9月

第3期：平成26年10月から平成27年9月

第4期：平成27年10月から平成28年9月（予定）

本事業は、日本赤十字社と浪江町からの資金により運営されており、単年度による拠出であるため、現在の運営は平成29年3月までの予定である。また、資金の状況により、運営体制を検討しながら継続を決定して行く。

本事業の目的は、長期化する避難生活への支援に関し、いわき市に避難している浪江町民を対象に、被災者の生命の安全と健康を守るため健康支援活動を実施し、町民間の絆を深め、コミュニティの再生を図り、潜在的な健康問題を顕在化すること、さらに健康問題の悪化を防ぐことを目指すものである。

本事業では、いわき市に「日赤なみえ保健室」を置き、家庭訪問による健康調査、交流会、健康相談等を行っている。これらの活動は以下の内容を意図として行った。内容は前年度と変更はない。

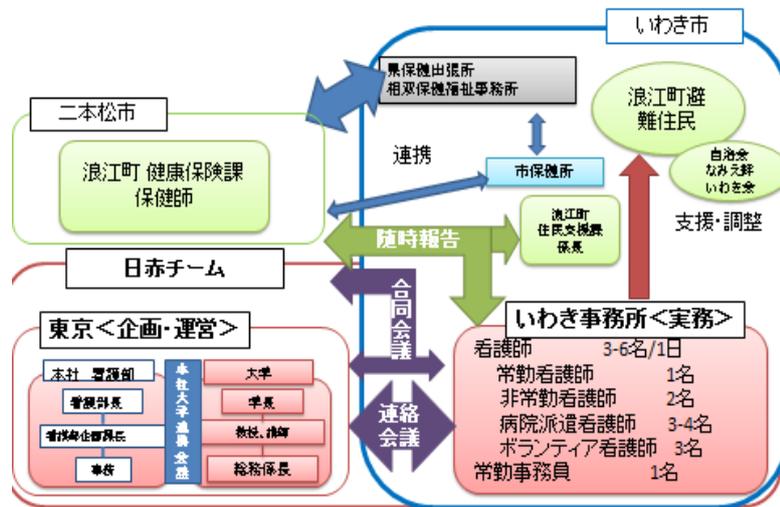
- 家庭訪問などにより住民個々が抱える保健や健康の問題を把握する。
- 健康に関するアンケート調査により浪江町民の健康状態と支援ニーズを把握する。
- 被災体験や思いなど被災者の“語りを聴く”という心のケアを行う。
- コミュニティの再生の一助とするため、健康の視点をもった住民の交流の場（以下、「サロン」とする）を開催する。
- 保健、衛生、健康に関する情報提供を、健康相談及び健康教室などにより実施する。

(1) 組織

a. 組織体制

これまでと昨年度と同様に、いわき日赤事務所の活動を中核に、事務所の後方サポート組織として日本赤十字看護大学と日本赤十字社本社が企画・運営を行った(図1)。さらに、①福島県相双保健福祉事務所いわき出張所、②浪江町健康保険課保健師3名(二本松常駐)、浪江町事務担当者1名(いわき市)、③浪江町住民組織(なみえ絆いわき会・ぐるりんこ隊)とも連携を取った。

関連組織（日赤本社・大学・浪江町など）組織図



< 図1 健康調査実施のための組織関連図 >

b. 日本赤十字社本社の看護部、日本赤十字看護大学の役割

日本赤十字社本社は看護部の中に浪江町支援担当者として、看護部長以下、看護部次長、事務担当者が、①事業概算の算出・活動資金の調整や執行、②全国7ブロックの赤十字病院から看護師の派遣計画と調整（1～2名ずつを2～3週間派遣する計画）、③いわき日赤事務所の確保と執務環境の整備、④派遣看護師のデブリーフィング、⑤調査結果データの入力と整理、等に関する活動を担った。

日本赤十字看護大学は、看護実践・教育・研究フロンティアセンターの実践部門の活動として浪江町健康支援事業を位置づけ、部門責任者がこれを担当し、いわき日赤事務所の組織と運営に関する役割を担った。具体的には、①健康調査計画の立案と実施、②現地スタッフの組織化とマネージメント、③各赤十字病院からの派遣看護師（以下、「派遣看護師」とする）の勤務体制とマネージメント、④大学教員の派遣計画の立案と実施、⑤健康調査の結果分析、⑥浪江町保健行政（保健師）への報告と他のサポートとの連携相談、⑦現地サポート組織との連携、を行った。

c. 人員配置

いわき日赤事務所には、①事務担当職員1名（日本赤十字社本社雇用）、②日本赤十字社の病院からの派遣看護師2名（5月から9月、9月から3月の2期に分けて募集した。2名/1月配置した）、③日本赤十字看護大学の非常勤職員（保健師1名、看護師1名、栄養士1名）3名。その日のスタッフでチームリーダーを決め、運営は日本赤十字看護大学の教員が運営責任を担った。④その他に、日本赤十字看護大学及び日本赤十字看護大学同窓会の協力を得て、単発のボランティアスタッフとして大学の教職員、同窓生も配置した。

d. 会議システム

それぞれの組織との情報交換と状況確認などのため、開設時から以下のような会議を設定し、定期的に会議を開催した。

浪江町・日赤連携会議

事務所の運営上の問題や状況確認、大学や本社の運営に関わる変更や方向性の伝達と検討、事業に関する改善点の検討することを目的に実施した。

メンバーは浪江町健康保険課の保健師、いわき市の行政窓口事務担当者、日本赤十字看護大学からは、いわき日赤事務所の大学側の責任者である学部長、運営担当教員、日赤なみえ保健室のスタッフ、時に日本赤十字社本社看護部の調整担当者であった。開催はおおよそ1回/3月とし、1年間で4回会議を開催した。

議事は、調査件数、サロン回数と参加者数、日赤なみえ保健室利用状況、調査の結果としてA判定者（要継続）に関する情報、浪江町の人口動態と今後の町の方向性（変化があったとき）、いわき市への新たな避難者データの引き渡し数などであった。討議事項としては、訪問時に問題となったケースの対処、交流会の持ち方などであった。

日本赤十字社看護部・日本赤十字看護大学連携会議

日本赤十字社看護部と日本赤十字看護大学との連携を強化し、本事業の運営を円滑にするために、赤十字組織間による会議を適時開催した。

メンバーは日本赤十字社本社看護部長、課長、事務担当者、日本赤十字看護大学学部長、運営担当教員、事務担当者であった。この会議では、事業全体及び事務所の組織体制の確認（特に予算及び人事）、看護師による中長期支援の質の向上に関する検討と研修会、今後の方向性等を討議した。開催は概ね2ヶ月に1回、今年度は6回であった。

(2) 財源と事業および事業内容

日本赤十字社と浪江町からの予算が計上され、健康見守り調査のみならず、交流会も多数実施した。第4期はサロンなどの交流会の実施に力を入れた(表1)。

表1. 第二期事業の財源と事業および活動内容

財源	活動	内容
日本赤十字社（東日本大震災復興財源）	1) 健康見守り訪問	安否確認と保健・健康の状態把握
浪江町（福島原子力災害避難区域等帰還・再生加速事業費）	1) サロン	健康増進を含む住民交流会の開催
	2) 健康相談	来所、電話での保健・衛生・健康の相談
	3) 健康教室	保健・衛生・健康の相談や健康教室の開催

(3) 活動状況

<健康調査およびサロン、健康相談>

a. 健康見守り訪問：安否確認と保健・健康の状態把握

安否確認と保健・健康の状態把握は、家庭訪問または、電話での聞き取りで行った。対象者は、いわき市に避難してきた浪江町民である。1年目の調査時に第1回目の訪問調査を実施し、1,067戸(2,256人)であった。その後もいわき市に避難してきた住民がいるため、月単位で浪江町よりデータが送られ、対象人数は増加している。転出者も見受けられるが、調査対象が個人ではなく、住居単位で行っており、訪問後に人数を知ることとなるため、訪問戸数に大きな変化はない。

第期の調査の対象は、平成24年10月15日～平成25年9月30日にいわき市に居住していた1,067戸(2,256人)、平成25年10月1日～平成26年9月30日にいわき市に移動してきた186戸(357人)、平成26年10月1日～平成27年9月30日にいわき市に移動してきた103戸(191人)を対象として実施し、合計1359戸であった。訪問回数は、平成24年10月15日～平成25年9月30日にいわき市に居住していた対象者は3巡目となった。平成25年10月1日～平成26年9月30日にいわき市に移動してきた対象者は2巡目となった。これら、2、3巡目の対象者の数が、第2期調査と違う理由は、いわき市内に居住地を新たに購入し同居者がそちらに移動したことによる(表2)。

これらの調査を通して、見守りや支援が必要な方のスクリーニングを行っている。今年度から、これらの支援が必要な方に関しては、浪江町保健師だけでなく、相双保健福祉事務所いわき出張所の保健師、福島県心のケアセンターいわき部の職員との会議を月に1回持って、情報交換や同行訪問を実施している。今後も地域の同種の支援団体や行政とともに対象者の健康を守り続けていきたいと考える。

表2. 健康見守り訪問の活動状況

	第1期			第2期			第3期		
	平成24年10月15日～平成25年9月30日			平成25年10月1日～平成26年9月30日			平成26年10月1日～平成27年9月30日		
	訪問回数	戸数	対象となる人数	訪問回数	戸数	対象となる人数	訪問回数	戸数	対象となる人数
平成24年10月15日～平成25年9月30日にいわき市に移動した戸数(人数)	初回	1067 戸(件)	2256 人	2回目	1067 戸(件)	2256 人	3回目	1070 戸(件)	2256 人
平成25年10月1日～平成26年9月30日にいわき市に移動した戸数(人数)				初回	184 戸(件)	357 人	2回目	186 戸(件)	357 人
平成26年10月1日～平成27年9月30日にいわき市に移動した戸数(人数)							初回	103 戸(件)	191 人
合計数		1067 戸(件)	2,256 人		1251 戸(件)	2,613 人		1359 戸(件)	2804 人
* 第3期で戸数が増えた理由は、同じ住宅に住んでいた人が、別に住居を設けたことで増えている。									
* このデータは、浪江町からの頂いたデータを基に訪問しているが、浪江町発表のデータと異なる。転居家族、および不明者も含まれている。									

b. サロン：健康増進を含む住民交流会の開催

サロンは、2013年11月から具体的に実施し始めた。平2014年度は、子どもを持つ母親へのサロン、写経、小物づくりサロン、体操サロン、健康増進を目的としたサロンなど多数を実施した。しかし、サロンの参加者が少なく、固定化していたため、多くが参加し、浪

江町保健師から継続の依頼があり、参加者の継続希望が高かった母子サロンを残し、その他のサロンは住民の希望により再開することとした。また、新たに日本赤十字社の病院から医師よりヨガ教室の提案を受け、住民の開催希望もあり、9月から1回/月に母親を対象としたヨガの会を実施した(表3、4)。ヨガ教室は子どもを持つ母親を対象にしたものは、4~12人の参加があった。住民を対象とした大人のヨガ教室では12~19人であった。前年度から継続している母子サロンは2回/月実施した(表5)。母親は2~14人、子どもは2~24人であった。

来年度は母子サロン、ヨガの会を継続実施予定しつつ、交流会等を企画したい本学教員や学生、本社職員等の参加を募り、新たな交流会を実施する計画である。

表3. 母親のヨガ教室

年	月日	参加者	スタッフ数
2015年	9月2日	14	9
	10月23日	19	4
	11月27日	16	6
	12月18日	12	2
2016年	1月29日	6	6
	2月12日	7	9



<母親のヨガ>

表4. 大人のヨガ教室

年	月日	母親	子ども	スタッフ数
2015年	9月2日	12	13	9
	10月23日	8	8	8
	11月27日	7	4	7
	12月18日	7	5	7
2016年	1月29日	4	4	6
	2月12日	5	4	9



<大人のヨガ>

表 5. サロン開催状況（平成 26 年 10 月～平成 27 年 9 月）

年	月日	内容	母親	子ども
2015 年	4 月 15 日	子どもの遊びと母親同士の交流	6	7
	4 月 22 日	こいのぼり作成	4	4
	5 月 13 日	子どもの遊びと母親同士の交流	7	8
	5 月 27 日	わにの工作	10	9
	6 月 10 日	子どもの遊びと母親同士の交流	6	7
	6 月 24 日	七夕飾りの工作	8	9
	7 月 8 日	子どもの遊びと母親同士の交流	8	9
	7 月 29 日	プール開き	9	14
	8 月 5 日	プール	11	11
	8 月 19 日	プール	8	13
	9 月 2 日	ママヨガ講座	12	13
	9 月 16 日	ママと子供の防災計画	11	11
	10 月 14 日	ハロウィンリース作り	6	7
	10 月 28 日	ハロウィンパーティ	9	10
	11 月 11 日	ペットボトルを使った工作	8	9
	11 月 25 日	子どもの遊びと母親同士の交流	7	8
	12 月 9 日	スノードーム作り	5	6
	12 月 24 日	クリスマス会	14	24
	2016 年	1 月 13 日	お正月遊び	7
1 月 27 日		節分(鬼のお面作り・豆まき)	7	8
2 月 10 日		子どもの遊びと母親同士の交流	11	12



<母子サロン>

c. 健康相談：日赤なみえ保健室への来所、電話での保健・衛生・健康の相談

日赤なみえ保健室への来所による健康相談は平成 26 年 10 月～平成 28 年 1 月までに 30 名であった。相談内容は、健康面についてであり、生活の指導を行った(表 6)。

表 6. 健康相談の概要

年	月日	相談内容	人数
平成 26 年	10 月		0
	11 月		0
	12 月		0
平成 27 年	1 月	なみえ交流館での男の料理教室に来ていた方の指の切創 に対して応急処置	1
	2 月	妻の疾患についての相談	1
	3 月		0
	4 月	健康調査のため来所	3
	5 月	健康面での相談（生活習慣病などの予防）	1
	6 月	健康調査のため来所	4
	7 月		4
	8 月	健康調査のため来所	2
	9 月	1. 健康上の問題で服薬している薬の事についての相談 2. 健康調査のため来所	7
	10 月	健康調査のため来所（引きこもりがちな義母についての 相談）	1
	11 月	健康調査のため来所	2
	12 月	健康調査のため来所	2
平成 28 年	1 月	健康調査のため来所	2

d. 健康教室：イベントなどでの保健・衛生・健康の相談や健康教室の開催

平成 27 年 9 月 3 日に、自治会と子どもやその母親とともに芋掘りのイベントで健康相談会を実施した。

次年度も、イベントでの健康相談を進めると同時に、浪江町からの要望も聞き入れ、他のイベント時も積極的に参加したい。



もたちの芋掘り>

e. その他の活動

<日本赤十字福島県支部との連携>

平成 27 年 11 月 12 日に日本赤十字社福島県支部による救急法講習会を日赤なみえ保健室ホールで夏に実施した。参加者は 15 人(浪江町民 10 人・いわき市民 5 人)であった。

演習用のマネキンの搬入から当日の人員配置など支部と連絡を取りながら、初めての開催であった。今後も支部と講習会などを共同開催するように進める。



救急法の様子

<日赤なみえ保健室の利用促進>

浪江町保健師からと、子どもを持つ母親へのサロン参加者からの要望があったため、平成25年4月から2回/月、キッズ開放日としてホールで子どもが遊べるように開放した。母親と子どもの利用は母親100~130人/子ども120~150人であった。

<インターンシップの受け入れ>

本学の災害看護グローバルリーダー養成プログラム（Disaster Nursing Global Leader Degree Program : DNGL）共同大学院災害の学生2名が、8月に第1~2週のインターンシップを行った。内容は、電話での訪問予約、家庭訪問による見守り健康調査への同行、子どもを持つ母親へのサロンへのスタッフとしての参加であった。日赤なみえ保健室のスタッフとの事業に関する話し合いにも参加した。

加えて今年度は、日本赤十字社の病院から派遣される看護師へのマニュアルの修正、健康調査票の修正も行った。

今後も、大学院生等の実習、インターンシップなどを積極的に受け入れたい。

（4）健康見守り調査と事業の方向性

現在、第三期事業期間アンケート調査結果の分析のまとめを行っており、平成28年4月に完成予定である。

今年度の調査から、住民が自宅の購入や復興住宅に移動していることがわかった。こうして恒久住宅に移動し、一見落ち着いてきていっているように見られるが、浪江町にいたるこのような人間関係や前向きな気持ちを持つところには至っていない。昨年につづいて、地域コミュニティが持っていた「地域住民同志の見守り力」、「行政に繋ぐ力」、「セーフティネット力（地域力）」の回復または新たな展開は見られない。個々の対応力、家族機能、個人の健康問題、地域とのネットワーク構築力（個人の）は、個々のあるいは家族の健康問題に影響していることに変わりはない。

今年度は、地域の支援団体や県の保健所との協力体制を強化した。ここでは、さまざまな組織で健康課題がある住民として上がっている方の情報共有や、本事業の見守り調査から見出された健康に関して支援や見守りが必要な住民の方の情報提供をし、必要な専門家が訪問するように調整を行った。これにより、地域で見守る体制を整備していく必要がある。

対象の住民の方々は、健康問題を予防、対処していくことのできる人だけではない。

①新たに健康問題が浮上してきた人（浪江町では健康問題と認識されなかった行動等が、現在の住民との関係性により異常行動と捉えられるようになり対応に苦慮しているケース等）、②明らかな疾患や障害があり、支援が必要と判断される人、③潜在的な健康問題を抱えており（慢性疾患や育児の悩みなど）家族や周囲の住民との関係性等によってはそれが健康問題として顕在化する可能性のある人、現在は、潜在的な問題が見当たらないが、これから地域で生活していく中で健康問題が生じる可能性のある人、など少

なくても①から③の様相が起こっている。①、②のような方々が、今後この地域に在住する時間や人間関係性により変化していくと思われ、健康になることが望ましいが、悪化することも予測される。加えて、②のようなグレーゾーンの人々が抱える健康問題のゆく末を見守る必要があり、この部分は特に本事業の期待される部分であると考え。

また、本事業も4年を迎え、平成28年度は資金的な面から一区切りとなることが予測される。平成28年度においても、日本赤十字社、浪江町から同額の資金の供与を受けることになっている。次年度は、今年度に準じた活動を行いつつ、本事業の総括を行いたいと考える。

平成28年度の業務計画の概要は以下である。

① 活動内容：

- ・ 全戸訪問
- ・ 継続的にフォローが必要な人々への支援
- ・ 対象者に応じた支援（例えば、高齢者であれば誤嚥予防のための口体操の実施など）
- ・ 母子の交流会開催（母親への支援活動が地域的に少なく、かつ要望があるため）
- ・ 復興支援住宅の入居に合わせた新規移動者への支援（安否確認、健康調査など）

② 人員：平成28年5～9月までは全国の赤十字病院からの派遣看護師1～2名/月、及び事務所スタッフとして看護師（常勤）1名、保健師（非常勤）1名、事務（常勤）1名で運用する。

③ 連携機関：浪江町だけでなく、県の保健所、福島県心のケアセンターいわき部、いわき市で支援をしているNGOとも連携を図る。

④ 大学内、赤十字関係機関での本事業の共有：報告会の開催、現地での研修会開催など。

⑤ 中長期災害看護教育の体系化：本社看護部と協議しながら、研究的に構築する。

3) 災害看護・支援活動情報収集

東日本大震災の復興に向けて、本学教職員、学生が様々な支援活動を展開している。フロンティアセンターでは、それら活動実績の収集および情報の発信を行い、支援している。

平成27年度の災害看護支援活動の実績は表7のとおりである。

表 7. 平成 27 年度 本学教職員の災害看護支援活動

職位	氏名	活動期間	活動場所	具体的な活動内容	連携先団体
教授	小原真理子	平成27年4月10日～12日	宮城県気仙沼市役所、気仙沼地区サポートセンター及び仮設住宅	災害看護CNS実習場新規開拓のための現地調査	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
助教	根岸京子	平成27年4月11日～12日	宮城県気仙沼地区サポートセンター及び仮設住宅	災害看護CNS実習場新規開拓のための現地調査	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
講師	内木 美恵	平成27年4月15日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成27年4月11日～12日	福島県南相馬仮設住宅	住民の健康生活支援活動	日本災害看護学会東北プロジェクト
講師	内木 美恵	平成27年4月22日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成27年5月5日～6日	宮城県気仙沼市鹿折中学校仮設住宅	災害看護CNS実習、現地調査	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
助教	根岸 京子	平成27年5月13日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年5月13日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年5月13日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授、助教	小原真理子、根岸京子	平成27年5月15日～17日	宮城県気仙沼市仮設住宅	住民の健康生活支援活動、災害看護CNS実習の一環	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
参事	洪澤 毅	平成27年5月18日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年5月18日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授	守田 美奈子	平成27年6月16日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年6月16日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授	守田 美奈子	平成27年6月17日	福島県支部、浪江町役場(二本松市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年6月17日	福島県支部、浪江町役場(二本松市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
参事	洪澤 毅	平成27年6月17日	福島県支部、浪江町役場(二本松市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年6月24日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年7月21日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年7月29日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年8月5日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年8月5日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
学部生	災害看護ボランティアサークル(SKV)	平成27年8月17日～19日	岩手県下閉伊郡山田町役場及び仮設住宅	住民の健康生活支援ボランティア活動	日本赤十字看護大学SKV
教授、助教	小原真理子、根岸京子	平成27年8月18日～19日	岩手県下閉伊郡山田町役場及び仮設住宅	学生と共に住民の健康生活支援活動	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
講師	内木 美恵	平成27年8月19日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年8月19日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
教授	守田 美奈子	平成27年8月25日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年8月25日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
教授	守田 美奈子	平成27年9月18日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年10月13～14日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年11月11日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年11月20日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年11月20日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成27年12月23～24日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成27年12月23～24日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
参事	洪澤 毅	平成27年12月23～24日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
教授、助教	小原真理子、根岸京子	平成27年11月23日～24日	茨城県常総市石下総合体育館、あすなの里	住民の健康生活支援ボランティア活動	日本赤十字看護学会 災害看護活動委員会
学部生	災害看護ボランティアサークル(SKV)	平成27年12月5日～12月6日	宮城県気仙沼市鹿折中学校仮設住宅	住民の健康生活支援ボランティア活動	日本赤十字看護大学SKV
教授	小原真理子	平成27年12月5日～12月6日	宮城県気仙沼市鹿折中学校仮設住宅	住民の健康生活支援活動、災害看護CNS実習の一環	日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域
助教	乙黒 千鶴	平成28年1月27日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	日本赤十字社、浪江町
参事	洪澤 毅	平成28年2月11～12日	日赤なみえ保健室(いわき市)	ヨガサロン運営	日本赤十字社、浪江町
助教	乙黒 千鶴	平成28年2月23～24日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
講師	内木 美恵	平成28年3月9日	日赤なみえ保健室(いわき市)	サロン運営	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成28年3月13日～15日	宮城県気仙沼市「気仙沼プラザホテル」、面瀬中学校仮設住宅	・健康教室における看護ケア活動 ・災害看護CNS実習報告会 ・28年度健康生活支援活動の打合せ	・赤十字学園助成金研究会 ・日本赤十字看護大学 国際・災害看護学領域 ・日本災害看護学会東北プロジェクト
参事	洪澤 毅	平成28年3月28～29日	日赤なみえ保健室(いわき市)	事業打ち合わせ	

名称	企画承認日	プロジェクトリーダー	プロジェクトメンバー	ねらい	年間計画	運営費	平成27年度 (2015) 中間
1 リサーチフェスタ	平成26年7月4日	吉田みつ子	・守田美奈子、吉田みつ子、江本リナ(日本赤十字看護大学) ・大和田恭子、那須照代(日本赤十字医療センター) ・加藤ひろみ、関根光枝、渋谷敬子、今井早良、池田美里、眞藤節郎、堀内勇人(日本赤十字医療センター) ・柳原直也(東京大学) ・守田美奈子、本庄恵子、住谷ゆかり、山本美乃(日本赤十字看護大学)	日本赤十字看護大学と近隣の赤十字病院は、実習、教育などを通じて、ネットワークを築いている。このネットワークをさらに発展させることに加え、赤十字リサーチフェスタでは、關心領域が近い医療職者と研究者が協働研究を行うことを行きつけをつくることを行なう。	1年に1回実施。 実施日:平成26年7月4日、平成26年7月3日、平成27年11月5日 平成25年4月から月に1回 平成25年4月から月に1回 研究委員会、年2回セミナー開催(2016年3月看護学会、2017年3月看護学会) 対象者のセミナー開催(実習・血液透析センター、緊急救命科内の看護師と、保生科のケアに向けてのケアモデル構築に向けてのケアセッション)セミナーを実施中。月に1回、フォーカスグループインタビューを実施している。	参加費300円	TRCセミナー開催、7クンセン)片一手の継続、保存期ケアのマニュアル作成予定
2 IRC研究会 (Total Renal Care)	平成26年11月7日	石橋由孝・守田美奈子	・坂口千鶴、千葉京子、清田明美、江島香月、比留間絵美(日本赤十字看護大学老年看護学専攻) ・現在このころ、医療士から参加者はいらっしゃらないが、平成28年度には参加して頂けるよう依頼を予定している。	個々の患者に最適な全人的総合腎不全医療(包括的腎不全医療: Total Renal Care:IRC)の推進と普及を目指す。 「学は分野横断的!」(実習は地域一対一)という理念のもとに、学際連携の発展を目的とし、新たな腎不全医療モデルの創造を目指す。	平成28年11月、平成27年2月、7月、9月に実施。今後6年生の実習に合わせて11月、12月、2月に実施予定	平成26・27年度学園助成	
3 My Turn (私の出番)プロジェクト	平成26年11月7日	坂口千鶴	・加藤ひろみ、那須照代、池田美里、今野穂子、渋谷敬子、今井早良、石井佳代、寺尾多喜子、湯田美保子、小林真理、宮副順子(日本赤十字看護大学) ・本庄恵子、下村裕子、和田康也子(日本赤十字看護大学)	日本赤十字看護大学周辺に在住し、人生経験の豊富な55歳以上の住民と看護学生が多くの音とつながり合いに交流する場をつくることを目的とする。	平成25年4月から月に1回 平成25年4月から月に1回 実施	平成27年度奨励研究助成	平成27年度の活動を継続し、来年度学生、医療センターやレクリエーションの職員、地域の高齢者とその家族の方々がたづねられる場を創出していききたい。
4 セルリアリア能力を高める支援の検討会 (SCAG研究会)	平成26年11月7日	石川祐子	・坂口千鶴、横田和子、山上潤子、佐藤尚子(日本赤十字医療センター) ・岡本薫(日本赤十字総合福祉センター) ・坂口千鶴、千葉京子、清田明美、江島香月、比留間絵美(日本赤十字看護大学老年看護学専攻) ・小原真理子、亀井緑、山本由香(日本赤十字看護大学)	高齢者の終末期の看護、終末期のケアの提供が不明確な状態の中、病院、施設、在宅で高齢者の看取りを行うことについて、そのケアニーズを把握することを目的とする。 1)平成26年度、モデルケースにも終末期にある高齢者やその家族へのケアのニーズを把握し、話し合う。 2)平成27年度、モデルケースの話し合いを深め、終末期にある高齢者やその家族のケアに携わっているスタッフが直面している課題について明らかにする。	平成26年11月から1回 平成27年11月より1回で行った。今後11月と2月に実施する予定である。	平成27年度奨励研究助成	平成26年度と平成27年度の活動結果を踏まえ、終末期にある高齢者とその家族へのケア連携もあわせて、具体的なプロジェクトを立ち上げる。
5 高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト	平成26年11月7日	坂口千鶴	・大和田恭子、丸山薫一、坂理知佳子、高木(日本赤十字医療センター) ・岡本薫、清水(日本赤十字総合福祉センター) ・前田久美子(日本赤十字看護大学) ・近藤尚子(日本赤十字看護大学) ・白井(日本赤十字看護大学) ・小原真理子、亀井緑、山本由香(日本赤十字看護大学) ・連携:協力関係、危機管理委員会、災害対策委員会、災害対策委員会(日本赤十字看護大学)、災害対策委員会(日本赤十字看護大学)	災害発生時に広域キャンパス内の各組織、および共同体として、被災に耐えられる役割を果たすための連携づくりを支援する。 1. 広域キャンパス内における各施設の自助・共助の強化 2. 医療救護、救命・救急 3. 災害時要援護者の安全確保 4. 被災者支援の体制 5. 防災・減災に強い組織づくりと人材育成 各施設の自助、共助の役割を明確にし、さらに三施設の防災上の連携、協働を構築する防災連携をつくりあげていくことを支援する。	平成26年度 5月、顔合わせ・プロジェクト方針の策定・年間計画策定 6月以降、各施設の計画などの共有 ・自衛消防団組織化 ・強要防衛 ・11月、大学の防災訓練参加 ・3月、本社の防災訓練		
6 広島地区地域防災プロジェクト HiCadiji Hiroo Campus Disaster Prevention Project	平成26年3月	小原真理子				検討中	
7 秋フェスタ	平成27年11月	(要検討)	(要検討)	日赤から連携するイベントを通して地域貢献を図ることを目的とする。地域との連携を図りながら、看護の強みを活かした地域貢献の在り方を構築していく。	11月14日のグローバルフェスタへ、医療センターの職員も参加し、地域貢献の在り方を考えることとする。		11月のグローバルフェスタへ、医療センターの職員も参加し、地域貢献の在り方を考えることとする。

平成 27 年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告

作成年月 平成 28 年 3 月

発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

編集 フロンティアセンター 広報

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3

日本赤十字看護大学

電話：03-3409-0875

FAX：03-3409-0589

印刷 西谷印刷株式会社
